

最初の指示を出してみましょう。まず、みんなを集めてやりますか。それとも、放送か何かで、全校生が廊下に勢揃いするんですか」

担任 「いえ、さすがにそこまではやりません。じゃあ、みんなを集めて指示します。

(大きな声で) みんな、集まれ。

いいか、これから、掃除をする。中学生になったからには、君たちも無駄話などせず、黙って掃除をやれ。

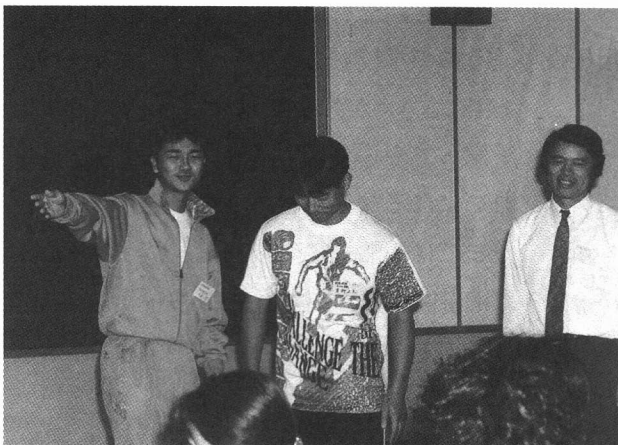
(留学生の5人に向かって) いいですか。日本では、みんな黙って、余計なおしゃべりなどせず、掃除をします。掃除をすると、どうなりますか、ミロくん」

ミロ 「はい。きれいになります。日本人もスペイン人もきれいずきです」

担任 「じゃあ、みんなの真似をしながらしっかりやるんですよ」

広い教室いっぱいに広がって、思い思いに清掃が始まる。隅の方で、しゃがみこんでおしゃべりする者、手をぶらぶら動かしているだけの者、担任が来ると急に真面目になる者、その中で、一群の女子生徒たちは、丹念に雑巾を絞り、床をふきがけしている。留学生も、雑巾の使い方を教わりながら見よう見真似で掃除をしようとする。ところが、突然イギリスから来た女子生徒が担任にくっついてかかる。

清掃が始まる——指示する担任



ダイアナ「先生、どうしてこんなことするんですか。イギリスの私の学校では、掃除なんてしません。それは、生徒の仕事ではありません」

担任 「日本では、生徒の仕事です。」

ダイアナ「では、どうしてせっかくワックスを塗ってある床を水ぶきするんですか。」

担任 「なるほど。では、掃除の仕方については、考えましょう」

ダイアナ「ではもうひとつ。どうして黙ってやらなくちゃいけないんですか。楽しくやってきれいにするのがどうして悪い？これ、まるで、囚人の労働です」

担任 「黙ってやったほうが、仕事の効率があがるということですよ」

ミロ 「いいですか。わたしは諺を思い出しました。ローマでは、ローマ人のごとくせよ、というやつです(笑い)」

ダイアナ「わたしは、おしゃべりしながら楽しくやりたい」

女子生徒「先生、あっちの男子を注意してください。さぼってばかりいるんです」

担任 「(素直に)はい。(爆笑)」

担任は、どなりながら跳んでいき、さぼっていた何人かを注意する。帰ってくると、ダイアナはブリジットと掃除をさぼって遊んでいる。担任は、そのことに気付くが、何も言わない。

一方、7、8人の生徒たちは、横に並んで、黙々とそして整然と床のからぶきをしている。その動きはダイナミックで、波のうねりのように芸術的ですからある。

監督 「はい。このくらいにしましょうか。それでは、感想を聞いてみましょう。そちらでは、ずいぶん熱心に掃除してましたねえ」

生徒 「はい。やっぱり、気持ちいいですね。一つのことを集中してやるのは」

女子生徒「おしゃべりは、またできるから、なんかやる時はこの方がいい。きれいになるし」